

平成13年度
近世史料館夏季展

江戸の旅—諸国めぐり—

期間：平成13年7月3日（火）～8月12日（日）
場所：金沢市立玉川図書館 近世史料館 展示室



箱根温泉の図（『東海道名所図会』より）

金沢市立玉川図書館近世史料館

はじめに

江戸時代以前の旅

江戸時代は、農民や町人などの一般庶民により、社寺参詣や湯治などの旅が広く行われた時代であった。それ以前の旅は、貴族や武士、裕福な商人、上層農民など、経済的に余裕のある人々に限られていた。庶民の旅も全くないわけではなかったが、それらは、税を納めるために為政者から強要された旅であったり、病氣平癒のための苦行であったり、あるいは旅それ自体を生活の場とするもので、遊楽と呼べるものではなかった。また、道路や宿泊施設など、旅をするうえで基本的な交通環境も整っていなかった。

江戸幕府の交通政策

慶長5年(1600)関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、翌年、東海道の「伝馬制」を敷く。これは、江戸・京都間に宿駅を定め、幕府の公用文書や役人をそれぞれの宿駅に用意された人馬によって、宿駅から宿駅へ継ぎ送るシステムである。その後、全国の諸大名に参勤交代が義務化されると、一行の宿泊所として、本陣や旅籠などの宿が各宿場に備えられた。ここに、輸送機能と宿泊施設をそろえた宿場町が確立する。さらに、街道には一里塚(距離の目安)が築かれ、並木が植えられた。このように、交通環境が着々と整備され、旅行しやすい環境ができあがっていく。

江戸時代の旅

一方、世の中が安定し、商品経済が発達すると、庶民の生活も向上し、遠隔地へ出かけるゆとりができてくる。こうして元禄年間(1688~1703)以降、伊勢参宮など社寺参詣を目的とする旅が行われるようになった。その後、旅は次第に物見遊山的な要素が強くなり、文化・文政の頃(19世紀初頭)には、社寺参詣に名所めぐりや芝居見物などを加えた、今日の娯楽的な旅の様相に近いものとなったのである。

ところで、旅は江戸時代の庶民にとって最大の娯楽であったが、同時に危険を伴う大変なものでもあった。交通環境が整い、比較的安全になったとはいえ、街道筋には旅人を狙う追い剥ぎやスリが横行し、山道では獣に襲われる危険もあった。また、基本的に徒歩の旅であったため、日数がかかり、その分費やす費用も多かった。そのため、多くの庶民は講という組織に入って、講員が積みたてたお金を資金とし、講の代表として旅をする、という形をとった。

さらに、江戸時代は定住生活が基本であり、居住地から移動するためには領主の許可が必要であった。必ず身元証明書を携帯し、そこには旅行の目的や道中で死亡した場合の後始末についても書かねばならなかった。また、幕府や藩が設けた関所を通過する際には、関所手形が必要であった。(展示品 21、以下番号のみ記す)これは、「入り鉄砲

に出女」(幕府の中心江戸に武器を持ち込んだり、人質となっている大名の妻女が江戸から脱出する事)を警戒したため、女性は必ず所持し、関所を通るたびに提出しなければならなかった。

このように様々な危険や制約があったが、庶民の旅は時代を経てますます盛んになっていった。それとともに、道中記や名所案内など、旅に関する出版物の刊行も増えていったのである。

旅と出版物

旅をする庶民が増加するにつれて、実際の旅行に役立つガイドブックのようなものが必要となった。この需要に応じて作られたのが、実用性に優れ、携帯に便利な、道中記・巡覧記・名所記などと呼ばれる旅行案内書である。これらは、旅路の宿駅・距離・駄賃・関所・名所旧跡などを記し、道中持ち歩きやすいように、小型の冊子や折本のような形をしていた。

道中案内書である道中記は、江戸時代のごく初期から出回っていた。17世紀半ば以降の旅の大衆化とともに、絵地図入りのものや、厚手の和紙の裏表に線引きの簡単な道中図を記した懐中用の簡便なものなど、様々な特色のあるものが生まれた。享保(1716～1735)頃からは、日本全図に街道を書き入れた、折本形式の道中記なども出始めている。(3・4)

また、江戸時代後期になると、道中記の中にも、より名所案内の記述が多いものが見られる。(8)このことは、庶民が、旅を物見遊山として捉えるようになった傾向を反映しているのであろう。こうして、名所図会^{めいしょずえ}という、名所の景観や概要を知ること重点を置いた名所案内記が現れる。

名所図会は、街道や宿駅などの案内を簡単に解説する一方で、考証に裏付けられた名所・事物の由来を記し、さらに写実的な挿し絵によって、鑑賞にもたえ、地理的説明も可能な、新しいタイプの案内書であった。その趣向が評判となり、最初に刊行された「都名所図会」(安永9年(1780)刊)は、爆発的な売れ行きを見せ、以後、摂津(大阪)、伊勢、江戸などの名所図会が、次々と出版された。(11・12・13)

これら名所図会は、かなりの大冊であるため、道中に持参するには不向きであった。普段、机上において、旅行前に見所を調べたり、読み物として読んだりする、といった形で使われたと思われる。さらに、このほかにも名所案内としての性格を持つ刊行物が多数出版されている。(15・16)

このように、旅に関する出版物は、庶民の旅行熱を反映して、江戸時代末期に至るまで、新しく作られ、あるいは版を重ねていったのである。

展示資料目録

日本図

1. 日本全図 年代不明 098.9-47
 鍬形蕙斎画。鍬形 斎は号で、本名は赤羽紹真という。ほかに、北尾政美などと号す。絵師北尾重政に入門し、挿し絵、錦絵などで活躍する。寛政6年(1794)美作津山藩の御用絵師となり、その縁で狩野派の画風も学ぶ。本史料は日本列島を上空から見た図である。
2. 大日本海陸全図 文久4年(1864) 22.2-80
 整軒玄魚編、東都 恵比寿屋庄七刊。編者は梅素亭玄魚とも号す、狂歌作者及び絵師である。本史料は、水戸の地理学者長久保赤水が作成した日本図の系譜を引くもので、実測図ではなく資料を元に作成された。緯度と経度が描かれている点の特徴である。

道中案内

3. 大日本早見道中記 年代不明 21.2-156
 富士谷東遊子校正、伏府 中西善右衛門他8名刊。全国の街道や宿場を記入しようとしたため、陸地の形はかなり歪められている。末尾には、主な街道の宿場間の輸送費が記されている。
4. 改正増補大日本国順路明細記大成 21.2-154
 弘化3年(1846)発行、嘉永3年(1850)開版
 東都 山崎久作校正増補。東都 甘泉堂和泉屋市兵衛刊。3と同様、全国の道中図であるが、こちらは蝦夷から朝鮮半島まで範囲が及んでいる。展示は、旅行に関する情報提供の部分である。天気予測の方法、旅の持ち物、船や駕籠に酔わない方法などが記されている。
5. 諸国巡覧懷宝道中記 文化5年(1808)刊 21.2-151
 東都 須原屋茂兵衛他1名刊。表裏に道中の細かい道順を記入している。また、伊勢や四国、長崎など各名所ごとに絵地図が描かれている。
6. 東海道巡覧記 延享2年(1745)序 091.9-225
 盧橋堂適志編。京から江戸への下り道中記だが、上京する際には、後ろから読めば用が足りるように工夫してある。展示は、箱根宿より小田原宿までの部分。箱根関所の項目では、関所の開閉時刻、女性の関所手形改めがある事が記されている。

7. 明和改正新版 増補 日本汐路之記 明和7年(1770)刊 20.2-95
高田政度編。京都 額田正三郎・大坂 奈良屋長兵衛刊。海上の道中記。各航路における磯・島・瀬戸などの難所、港のよしあしなどを記す。展示は、下関より津軽青森まで北国廻りの航路上、能登国輪島港の部分。

8. 諸国道中たひ鏡 弘化4年(1847)刊 091.9-133
紫山加治禎胤著。東都 奎文房 和泉屋半兵衛版。和泉屋吉兵衛他 26名発行。著者は儒学者で、松平定信に仕えた。序によれば、本書発行時点までに67回旅行をしたという。主に東海道と中山道の道中を記すが、箱根などの温泉や名所の絵図を多く挿入している。図は富士登山勝景全図。ほかに富士山頂上の図などが描かれている。

9. 従金沢至京都道中名所記 嘉永7年(1854)刊 098.0-46
金府 等願精舎藏。金沢から京都にいたる道中の名所を記す。宿屋、駄賃などの情報は少なく、名所案内がほとんどである。展示は野町一里塚の部分で、二万堂川という川名の由来を記している。

10. 新板 金沢道中双六 年代不明 k7-129
一寿齋芳員画。江戸 和泉屋市兵衛板。

名所案内

11. 都名所図会 安永9年(1780)刊 13.9-56
全6巻6冊。京都 秋里籬島著、浪花 竹原春朝齋画。京都 吉野屋為八刊。名所図会の嚆矢となった作品。著者の籬島は、本書の好評を受けて、畿内近国や道中の名所図会を次々と書いていった。展示は、音羽山清水寺の全景。

12. 東海道名所図会 寛政9年(1797) 091.9-160
全6巻6冊。浪花 榊原喜兵衛他三都書林10名刊。秋里籬島著。鋏形蕙齋・竹原春泉齋等画。京都から江戸日本橋まで、下り道中の名所旧跡から歴史的事実や伝説、産業や名産まで述べている。展示は、中山道と東海道の分岐点近江国(滋賀県)草津である。

13. 江戸名所図会 文政12年(1829)序、天保5年(1834)刊 291.36-3
全7巻20冊内3巻10冊のみ。齋藤月岑著、長谷川雪旦画。須原屋茂兵衛他三都書林13名刊。江戸の町名主である齋藤家の親子が三代にわたって、調査、編述した本。実地調査及び写生に基づく内容で、史料的价值が高いと言われている。展示は、駿河町の呉服店越後屋付近である。

14. 江戸鳥瞰図 年代不明 大964
鋏形蕙齋画、野代柳湖刻。江戸鳥瞰図の古典的な図柄である。

15. 京都順覧記 天保2年(1831)刊 21.2-218
全3冊。皇都 池田東籬亭編。中村有楽画。京都 竹原好兵衛刊。京都町中を散策する際の案内書。名所案内だけでなく、公家や大名の屋敷地まで分かるようになっている。また、巻末には、発行元の本屋竹原好兵衛が刊行した、他の道中記・絵図類の宣伝が掲載されている。

16. 浪華の賑ひ 文久3年(1863)発行 21.2-229
全3編3冊内2編のみ。鶏鳴舎暁晴翁編。松川半山画。大坂 河内屋喜兵衛他2名刊。大阪の名所案内記。展示は、道頓堀芝居小屋のあたり。

17. 浪花みやげ 嘉永6年(1853)新板 21.0-24
曙千角作。書林兼草紙屋 大坂 塩屋喜兵衛版。大阪土産として買われた番附(力士などを位付けし、その名を位順に記したもの)集。展示は、日本・中国内の雨や雪の名所を、相撲の番附になぞらえて、位付けしたもの。前頭8枚目に能登国宮崎山が位置している。

関・宿

18. 諸国定宿附 天保6年(1835)改 21.2-202
なには組 発起人 松屋源助編。道中の旅籠(食事付の宿)の中には、悪質なものが多かった。よって、旅人が安心して宿泊できる宿を提供するため、文化13年(1816)、大坂の松屋源助が発起人となり、浪花組という旅籠組合が作られた。当史料は、組合に加入した旅籠(定宿)の一覧で、旅人は、組合保証付きのこれらの宿には安心して泊まることができた。

19. 大坂ヨリ西京マデ道中判取帳 年代不明 21.2-230
大川組 船問屋世話人中編。船問屋らが同業者のために作った定宿帳。宿泊した宿で押印してもらう事になっていたため、判取帳という。

20. 境関所等之図 年代不明 16.78-49
境(越中国)、市振(越後国)、関川(同前)、碓氷(上野国)の各関所の絵図と、通過する際の心得などを示したもの。

21. 越中境関所通行切手 090-316
天保12年(1841)6月26日 北川屋豊右衛門
天保12年(1841)6月29日 大浦屋幸右衛門
関所を通過するときに必要な通行許可証。関所手形ともいう。このような切手は、関所を通過する前の宿屋で、発行を頼む事ができた。大浦屋幸右衛門は、金沢の宿屋である。